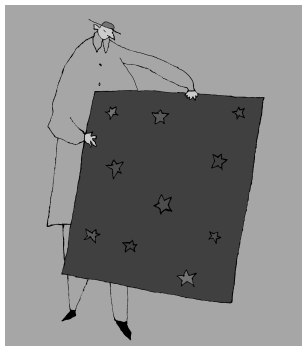


第9話 星のない夜



時刻はすでに午前一時にならんとしている。

つい、話に夢中になってこんな時間になってしまったが、シユロは映画を観た満足感だけではなく、目の前にいる青年に少なからぬ興味を抱いていた。

十一時過ぎに上映が終わり、客席からロビーに出てきたところに、ちょうどあの青年が立っていた。

「あの」とシユロにしては、めずらしく積極的にふるまったのは、その青年が書いたリーフレットの文面が、気に入ったというより気になったからである。

青年はシユロの父親である田代龍一郎たしろりゅういちろうについて、少なくともシユロよりはるかに詳しかった。そうした知識をどこで手に入れたのか、「任侠にんきやうものもの親分」や「零落した貴族」といった役を演じたことと記してあるが、実際にそれらの映画を観たこと

があるのか、もし、あるとしたら、いま、それらを観るのは可能なかどうか——訊きいてみたいことは多々あった。

それはシュロにしてみれば思いがけないことで、脇役ばかりを演じてきた父のことを、自分よりも知っている人が存在し、その人と父親について言葉を交わす機会が持てるようになるなど、これまで一度として経験もなければ、予測したこともなかった。

しかし、青年は「申し訳ないのですが」とことわりおき、「僕はいま勤務中ですので、もし、あと三十分お待ちいただけるのでしたら、お話をうかがうことは出来ます」と小声でシュロの問いかけに答えた。

「それと、もうひとつ申し訳ないことですが、リーフレットには、まるで本当に観たことがあるかのように書いていますけれど、任侠ものの親分を演じた——それは『極楽まで』という映画ですが——も、零落した貴族を演じた——こちらは『明日の夕陽』という作品ですが——僕は残念ながら

「どちらもまだ観ていないんです」

シュロにしてみれば、父親が出演した映画のタイトルを、すらすらと口にするだけでも大きな驚きだった。

彼の勤務が完全に終わるまでロビーで待つことにし、そのあと、青年の案内にしたがって深夜営業をしている彼の行きつけのバーに連れて行かれた。

「すごく暗いんです」と彼は道すがらその〈走馬灯〉というバーについて解説を始めた。どうやら、この青年は解説することが得意らしい。

「といっても、店主が暗い性格とかそういうことではなくて、本当に店の中が暗いんです。中に入っただけは自分の手もとさえ見えないほどで。僕みたいに映画館で働いていても、あの暗さにはまったく驚かされます」

これは、実際にバーの扉をあけたときに現実のものとなった。シュロもまた職業柄、物騒なところをいくつもくぐり抜けてきたのだから、身のすくむような暗い場所には免疫がある。そんなシュ

口であっても、中に入るのが一瞬、憚はばかられた。手もともそうだが、まずもって足もとが見えない。

立ちすくんだまま暗さに目が慣れるのを待っていると、勝手を知っている青年が「こちらです」と先立って前へ進んだ。シユロは彼がつけていた柑橘系の香りがするオーデコロンを頼りに、暗闇くらやみの中をとりあえずついてゆく。

しかし、どういう構造のバーなのか、体感としては五、六メートルくらい歩いているのに、なかなか、酒やグラスやそれらを操る店の人の気配といったものが伝わってこない。

「この店はいったい——」

シユロがそうつぶやいたとき、ようやく暗さに目が慣れたのか、それとも、そこにバーの止まり木があつて、わずかながらほのかな照明が施されていたからなのか、青白い光の周辺に店主と思われ人影が立っているのが判わかった。

「いらっしやいませ」

影は丁重にそう云いい、

「こんばんは」

青年もまた丁重に応^{こた}えた。

青白い光のおかげで、しだいに横長のカウンタ
ーと背もたれのついた細身の椅子^{いす}が浮かび上がっ
てくる。いったん、そこへ腰をおろしてみれば、
たしかに暗いことは暗いのだが、バーとしてはシ
ンプルな作りで、ただ、入口の扉からカウンタ
ーまでの距離が尋常ではない。そのあいだに誘導
灯のひとつもないのは、どう考えても異様だった。
「リーフレットに書いたことはまったくの知った
かぶりなんです。ですから、僕は田代さんの――
田代さんでいいんですよね？」

「ええ」とシユロは青年の顔を見返そうとしたが、
もうひとつぼんやりとして目鼻立ちが判然としな
かった。

「田代さんの父上が、どんな俳優さんであったか
熟知しているわけではないんです」

二人の頼んだ酒がカウンターに並び、乾杯をす
るでもなく、めいめいにグラスに口をつけて「う
まい」「おいしい」と息をついた。

「じゃあ、どうやって――」とシユロが訊いたの

と、

「この町の図書館に通いまして」と青年が話をつづけたのが同時だった。「この町の図書館には、たまたま昔の映画雑誌が豊富にあったんです。だから、リーフレットの文章はほとんどそこから引用したもので、ですから僕は本当に何も——」

「そうでしたか」

シユロは酒の甘い香りを愉たのしみながら頷うなずき、さすがは名探偵らしく青年の言葉のはしばしに感ずるところがあった。

「この町の図書館」と彼は云ったが、その話しぶりからして地元の間人ではないように思われる。比較的、最近、この町で生活をするようになったのではないか。バーの店主とのやりとりにしても、長く常連であったとは思えない——。

シユロはそのあたりのことを訊いても特に問題はないだろうと判断し、青年の名前を口にしようとしたが、考えてみると、まだ訊いていなかった。

「ええと——お名前をまだ」

「あ、すみません」と彼は口に運びかけたグラス

をカウンターに戻し、「冬木ふゆきといいます。冬木蓮れんです」と自身が名刺でもあるかのように椅子の上でしゃんと背筋をのばした。

「蓮さん」とシユロはその名を繰り返し、「じゃあ、さっそくそう呼ばせていただきますけれど、蓮さんは最近、この町に住むようになったんですか」

「ええ」と青年はそう応えて口をつぐみ、それから意を決したように、「ちよつと事情があります」とグラスの中のを少し多めに口に含んだ。「といっても、大したことではないんです」

青年は心なしか声をひそめていた。

「家を出てから、あちらこちらで働きながら旅をつづけてきたんです」

「家を出て——というのは？」とシユロが訊くと、「まあ、いわゆる家出というやつです」青年はなおさら声を落とした。「あの映画館は、たまたまポスターに目がとまって、そこにアルバイト募集の告知があったので——」

「映画が好きなんです」

「映画が——というより映画館がです。街なかにある唯一の逃げ場所というか。ここもそうですけど、僕はどうも暗いところに惹かれるんです」

「仕事はリーフレットの執筆専門？」

「まさか」

青年は驚きを交えてシュロの顔を見なおし、

「アルバイトというのは、云ってみれば、何でもする係みたいなものです」

シュロという男は、世間において「名探偵」などと持ち上げられているが、じつのところ一般常識にはまるでうとく、たとえば、コイン・ランドリーの使い方であるとか、積立貯金の仕組みであるとか、あるいは、「成分調整牛乳」とはどういうものかといった、ごく普通の知識が著しく欠けていた。

「チケットの販売から売店のホットドッグの仕込みまで、およそのことは僕がひとりですべてやっています」

青年は声の大きさを元に戻した。

「さっきのあの支配人さんは悪い人じゃないけれ

ど仕事らしい仕事はほとんどしないんです。映画の知識も大したことないし——」

「え?」「本当?」「そうなんだ」とシュロは彼の話にいちいち驚き、青年は青年で、

「田代さんはどんなお仕事をされているんですか」

と、いきなり直球で訊いてきた。

こういうとき、シュロはかつて経験した数々のアルバイトの中から「パチンコ屋の店員」や「弁当屋の調理係」や「駅前のコーヒー・スタンドのわかバリスタ」などを挙げてごまかしているのだが、

「じつは、役者をめざして修業中なんです」

と思ってもみないことを口にしていた。

罪なことに「ああ、やっぱり」と青年はまったく疑うこともなく本気になっている。

「父親の仕事を引き継ぐというのに、昔からあこがれていました」

「そう? 蓮さんのお父さんは——」

「僕は引き継ぐとかそういうことを考える間もな

く両親を亡くしてしまつて。中学一年のときです。父と母は親類の葬儀に出かけた帰りでした。僕は留守番をしていたんです。父の運転する車で夜おそくに首都高を走っていて、猛スピードのトラックと接触したらしいです。横転して炎上して——くわしい話は耳をふさいで聞かなかつたんですが、それで僕らはそのあと叔父夫婦おじに育てられたんです

「僕ら？」

「ええ。姉と僕です」

「お姉さんがいる？」

「そうですね。たぶん、元気にしているはずですよ。僕のふたつ上だから、姉ももう三十八になるのかな」

「え？」とシユロは上体をびくりとさせて驚き、

「ちよつと待つて、蓮さんは——冬木さんはそうになると三十六歳なんですか」

「ええ、生きていれば」

「生きていれば？」

シユロは急におそろしくなつてきて、この妙に

暗いバーや、その屋号が〈走馬灯〉であるのも、いま彼の云った「生きていれば」というセリフと関わりがあるのかと、頭の中にいくつもの推理が駆けめぐった。

しかし、彼は「すみません、冗談です」と顔の前で手を振り、それから「あ、でも三十六歳というのはそのとおりで、まあ、僕は二十四歳からこっち、なるべく成長しないように心がけてきたんです」

そう云われて、あらためて彼の顔を確かめると、青年と思われた面影は少しばかり後退し、青年の風情を奇跡的にそのままのこした、いわば「青年の晩年」とでも云うべき容姿であることを発見しなおした。

これはしかし、シュロもまったく同じで、シュロもまたちようど二十四歳くらいからいっこうに歳をとっていないように見えた。「少なくとも三十歳を超えていない」と周りの人たちは皆そう思っている。

シュロ自身が歳をとっていくことを病的に嫌っ

ていた。いつまで経^たっても青二才のように下に見られても、（それでいいんだ）と、むしろ喜んでいた。

「たまに姉を驚かせたいって思うんです。たとえば、明日にでも姉と暮らしていたアパートに帰って、十二年前のいなくなつた当時とまるで変わらない自分を目にしたら、どう思うだろうかって——」

「帰るつもりがあるんですか」とシユロは青年が青年の晩年に属するのだと知つたら、自然と言葉づかいが変わってくるのを自分でも（おかしい）と笑い出しそうになつた。

「いや、帰らないとは思いますがけれど、あくまで空想としてです——」

「でも、どうして帰らないんです?」

「それはもう簡単な話で、どうしても姉に依存してしまふからです。そういう姉なんです。人の話を聞くのが得意だし、大抵のことは何でも解決してくれます。僕の成長が止まってしまったのも、そこに理由の一端があつたのかもしれませんが、

こんなふうになんでも姉のせいにしてしまうのもよくない癖です。だから、自分としては色々な意味で姉から離れることで、人並みの成長をもとめたんです——」

彼はわざと顔をしかめて、苦そうに酒を飲んだ。「でも、ご覧のとおり、まったく成長できませんでした」

カウンターの向こうで影のような店主が黙々とグラスを磨き、その乾いた布がたてるキュッキュッという音が二人の話の合いの手のように響いていた。

シユロは、いまにも彼が「田代さんはどうなんですか?」と訊いてくるのではないかと警戒し、店主の作業に気をとられているふりをして、彼から目を逸^そらしていた。もし、正面から「どうなんですか?」と訊かれたら、シユロもまた「父親の出演した映画を探しては鑑賞している」と正直に答えていたかもしれない。

それまでさして興味を持っていなかったのに、いつからか、父親ののこしていったものに虫眼鏡^{むしめがね}

をあてがって覗き見ようとしている。それは、はたして成長の停滞と変わりがないのかどうか、シユロには正しい判断が出来ない。

探偵というのは他人事ひとことであれば込み入った事情を難なく解いてみせるのに、いつでも「自分」という謎なぞについてはお手上げになる。

「お役に立てなくてすみません」と青年の晩年の彼は云った。

「いえ」とシユロは首を振る。「そもそも、昔の映画雑誌を調べてみるという、そういう基本的なことすら怠っていたのだと思います」

「僕の方は」と彼はグラスを空にして云った。

「リーフレットにも書きましたが、どうして今回の映画がうちの映画館に保管されていたのか調査をつづけたと思います」

彼の方がよほど探偵的資質を備えているんじゃないかとシユロは苦笑し、「帰ります」と彼へ向けてなのか、それとも影のままの店主に向けてなのか、とにかくそう云って、カウンターのの上に酒の代金を置いた。

「タクシーを呼びましょうか」という彼の声に、「いや」とシユロはかぶりを振り、どういふものか自分でもよく判らなかつたが、（とにかく）と念じて、そそくさとカウンターを離れた。

入ってきたときより、幾分、暗さが甘く感じられたが、それでもほとんど真つ暗に近い通路をドアに向けて出来る限りまっすぐに歩いた。ひたすらまっすぐに歩き、だいぶ進んでから、前へ出した右手がドアと思われる木材の感触にようやく突き当たった。

しかし、ドアは固く閉ざされている。

思いきり力をこめ、あたりに立ちこめる闇のかたまりごと外へ押し出すように、両手でドアをぐいぐいとやった。

が、起きたことはまったく逆で、あたかも闇のかたまりが人のかたちを成し、シユロはその怪物めいた何ものかにつまみ出されたかのように重心を失って路上でよろめいた。

もつとも、これはただ酔っていただけとも考えられる。

何であれ、無事に外へ出られたのは幸いだだったが、タクシーを呼んでもらうべきだったか、と早くも後悔していた。

シユロは額に浮いた汗を拭ぬぐいたくて上着のポケットにハンカチを探り、しかし、指先がふいに冷たいカードに触れて、「なんだろう」と引き出した。

夜のタクシー〈ブラックバード〉

とある。

「そうか、あのときの——」

あのときは映画を観たあとにしばらく一人で歩きたくて、結局、タクシーを呼ばなかった。以来、ときどき思い出しては気になっていた。機会があったら、お詫わびをしたいと思っていたのだ。こんな東京のはずれまで来てもらえるかどうか判らないが——やはり無理だろうか——いやしかし、とりあえずかけるだけかけてみよう——名刺にあった番号を携帯電話に打ち込み、呼び出しのコールをひとつ聞いたところへ、通りの向こうから黄色い車体のタクシーが「空車」の赤字を光らせて走

り寄ってきた。

天の助けか——。

反射的にシユロは電話を切り、急いで手をあげて、そのタクシーを呼びとめた。

*

参ったな、今夜はハズレか——と松井まついは休憩をとるべく、いくつかあるスポットのひとつに車を停とめていた。すぐ近くに私鉄バスの折り返しステーションがあり、その裏手に公園があつて、トイレもあつて、手を洗うことが出来た。

一年に何日か、今日のような一人も客に当たらない夜がある。東京というのはじつに不思議なところだ。日を置かずして同じ客を何度も乗せることもあれば、ここは本当に都会なのか、と思うほど、どこへ行ってしまったのか、まるで人がいないときがある。それはもう怖いくらいで、いつか観たSF映画のように、自分ひとりをのこして街の人々があとかたもなく消えてしまったかのよう

に思う。

松井はエンジンを切ってシートを倒し、体の力を抜いて、窓の外の夜空を眺めた。

どこにも星が見当たらない。

いや、本当は無数に出ているのだろうが、今夜は星さえも遠のいてしまったかのようだ。

こういう日はががつしないこと——と自分に云い聞かせ、ため息をひとつついた途端、携帯電話の呼び出しコールが鳴って、素早く画面を見た。

知らない番号だ。

「誰だれだろう」とつぶやく間もなく、コールひとつだけで、ぷつりと切れた。

誰か？ 松井の携帯に電話をかけてくるのは、十中八九、お得意様なのだが、彼ら彼女たちはひとりひとり名前を登録しているので、画面にフルネームが出る。しかし、いまは出なかった。となると、間違い電話であったか、でなければ、前に名刺を渡したことがある新規のお客様か——。

松井はふと、冬木可奈子かなこの顔を思い出した。現時点では彼女がいちばん新しく登録されたお得意

様なのだが、それゆえ、もし、彼女であれば画面にその名が表示される。

もし——か。

時計を見た。

じきに午前二時になろうとしている。

しかし、まだ早かった——というか、全然早い。

たしか、彼女の仕事が終わるのは午前七時で、終わるどころかまだ始まったばかりに近い。だから、そんな計画などしても仕方ないのだが、またあの食堂に彼女を誘い、一緒に朝御飯を食べるのはどうだろうかと現実逃避に走りたくなってきた。どうせ、今夜は客がない。そういう夜なのだ。

松井は登録から彼女の携帯電話の番号を呼び出し、

「いや」

と首を振って、すぐに待ち受け画面に戻した。

彼女はいまオペレーターの仕事中的はず。プライベートな携帯電話にコールをしても出るはずがない。

いや、しかし待てよ、と松井はもういちど彼女

の電話番号を表示し、登録画面を確認すると、プライベートな番号とは別に、東京〇三で始まる十桁けたの数字が並んでいた。

「もし、悩み事や困ったことがあったら、この番号にいつでもどうぞ」

と、ついでに教えてもらったものだった。ついで、と云うより、むしろそちらの方が東京都民には有名で、いまや、「駆け込み寺」とまで呼ばれている〈東京03相談室〉の番号である。まだ仕事の中なのだから、こちらの番号にかけてみて、もし、運良く彼女につながったら、声色を変えて、〈ブラックバード〉の松井だとは明かさずに相談をしてみる――。

それは面白い。

自分だって都民の一人なのだし、

「タクシーの運転手さん、結構かかってきますよ。お悩みがたくさんあるみたいですよ」

と彼女は云っていた。

もし――。

もし、もういちど朝御飯と一緒に食べることが

叶かなったとしても、松井はそのこと自体に喜びを見出いだすだろうが、そのうち、このあいだ聞いた彼女の弟さんの話になり、その流れから、「自分にも探しているひとはいて」と自ら話を蒸し返して、誰にも云えなかったことを彼女に話してしまうに違ちがいない。

いや、それでいいのである。なにしろ、彼女はそれが仕事で、誰にも話せなかったことを「どうぞ、話して」とひととおり聞いて、なんらかの「答え」を返してくれる。

「じつは、私——」と松井は頭の中で話すことをシミュレーションしてみた。

「じつは、私、タクシーの運転手なのですが、以前、一度だけ乗せたことのあるお客さんのことがずっと忘れられなくて——女性なんですけれども——大変、うつくしい方で、なんと云いますか——もういちどお会いできたら、と年とし甲斐いもなくそんなことを思ってしまうのです。ときどき、悶々もんもんとしてしまって、こういう場合、一体、どうしたらいいのでしょうか？」

しかし、こんなでたらめな相談に、まともな答えが返ってくるとは思えない。彼女もただ困惑するだけだろう。

やめよう——。

いや、しかし——。

いや、やめよう——。

いや、しかしだ——。

*

シユロが黄色いタクシーの運転手に行き先である自宅の住所を告げると、

「ああ、あの角の交番からピザ屋の方へ行って、コンビニと酒屋の先を右に曲がったところですね。昔、あのあたりにアタシの友達が住んでいました——」

やたらに詳しかった。

揭示されたプレートによると、運転手の名前はながさわだいすけ長澤大輔で、「アタシ」と自分を称するのは、その早口な口調からして生粋の江戸っ子であるから

に違いなかった——というのは、あくまでもシユ口の推理だが、これはもうほとんど断定に近い推理である。

推定年齢〃四十八歳。晩婚であったから、目に入れても痛くない可愛^{かわい}い娘はまだ五歳である。それが証拠に、「パパ、がんばって」と覚えての拙^{つたな}い字で書かれた名刺大の紙きれが、ダッシュボードの隅にセロハンテープで留めてあった。

趣味は日本全国のロードマップを隈^{くま}なく記憶すること。手始めの東京二十三区はもちろん、近隣の市や県まで把握し、自分のなわばりはおよそのところ完璧^{かんぺき}と云っている。そのうえ、乗客とラジオとスポーツ新聞から仕入れた通な情報を加味し、「ここでは」「あそこでは」と窓外を過ぎゆく地味な風景を前にして、いちいち隠されたエピソードを披露してゆく。

すべてが過剰にして異常だった。異常なほど長澤運転手は何でも知っていて、定番の「おいしいラーメン屋」を皮切りに、「二十四時間営業のスーパーマーケット」から「門番のいる政治家の私

邸」まで、正確な住所つきで挙げ出したら、どこまでもきりがない。

「〈大門〉っていう焼きそば屋は知ってます?」
とシユロが昔よく行った店の名を挙げると、「もちろん」と長澤運転手は即答し、「じゃあ、〈ふらつぐ〉っていう喫茶店は?」と畳み掛けても、「知ってますよ」と住所のみならず電話番号まで諳そらんじた。

そこでシユロは、「たとえば、食堂なんかはどうでしょう?」と漠然と訊いてみると、

「食堂だったら、随時、六百軒は頭に入ってます。お好みを云っていただけだったら、どこへだってお連れしますよ」

「本当に?」とシユロは抑えようとしたが口が勝手に動いていた。「場所は赤羽あかばねの岩渕いわぶちのあたりで、〈キッチン・アヤ〉っていう食堂。ずいぶん長いこと行ってないんだけど、ひさしぶりにあの店のハムエッグ定食を——」

「ああ、あの店はもうありません」

長澤運転手がきつぱりとそう云った。

「あの食堂の女性店主は、いま別の食堂をやっています。女ばかり四人で始めた店なんですけど、これがまたいい食堂なんです。片時町かたときちょうの交差点にある、〈よつかど〉って云う店なんですが」

じつを云うとシユロは、アヤノさんの店がすでにもうなくなっていることを、昔住んでいたアパートをめぐり歩いたときに確認していた。

呆然ぼうぜんとなった。

まだ、〈キツチン・アヤ〉はそこにあると思っ
ていたし、アヤノさんも昔どおり変わらずに元氣
よくハムエッグ定食をつくっているだろうと勝手
に思い込んでいた。

いや、そうじゃない。アヤノさんはいまもきつ
とハムエッグ定食をどこかでつくりつづけている。
彼女らしいあたらしい食堂を構えて——そう信じ
ていた。

「片時町か——」

シユロがつぶやくと、

「行ってみます?」

長澤運転手がけしかけるように云った。

「いや、本当にいい食堂なんです。なにしろ、朝までやってるから運転手仲間にもウケがよくて。

アタシもね、ときどき寄らせてもらってます」

「じゃあ——行ってみようかな」

シユロは迷っているふりをしてから、そう答え
た。

そもそも、この饒舌じょうせつすぎる長澤運転手の話を聞
いていたら、空腹が刺激されてたまらなくなつて
いた。

いや、それはたぶん自分への云い訳だ。

本当にその食堂にアヤノさんがいるのなら、ぜ
ひ、もういちど会って話がしてみたい。

シユロはタクシーの窓ごしに暗い東京の空を見
上げていた。

星はひとつも出ていない。